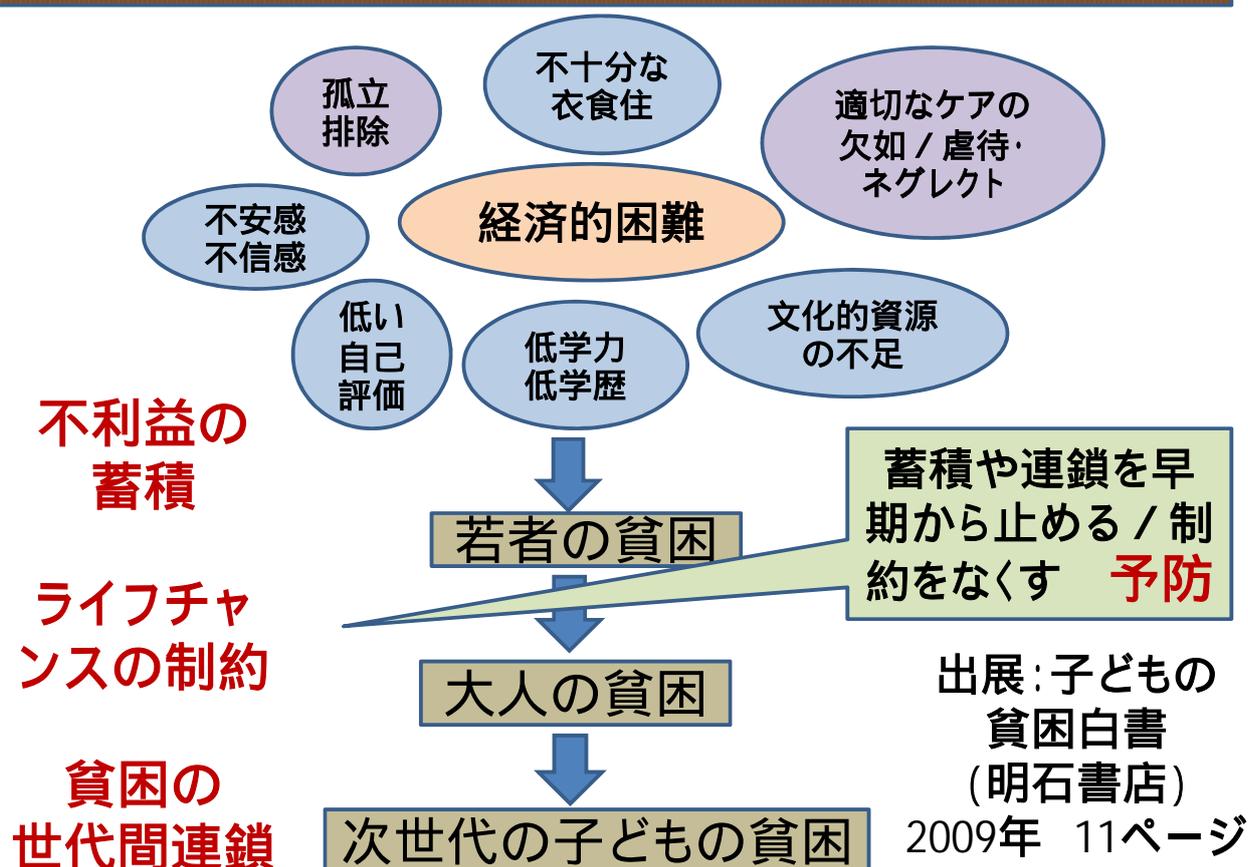


【テーマ別研究協議】
家庭訪問による効果的な
家庭教育支援の充実に向けて

家庭訪問支援の現状とこれからの展望 :地域の支援者による協働を視野に入れて

2013年10月9日(水)9:30~10:00
於 国立オリンピック記念青少年総合センター
講師:伊藤 篤(神戸大学)

家庭支援で着目すべき観点(子どもの貧困を中心に)



虐待・ネグレクトの課題 (Target支援の1つ)

西暦 元号	児童相談所 相談件数	養護施設数	養護施設 入所定員数	養護施設 在籍児童数
1990年 平成2年	1,101	533	34,914	30,787
2000年 平成12年	17,725	552	33,803	28,913
2010年 平成22年	56,384	582	34,215	29,975

以前なら親子分離のケースが分離できていない可能性 「予防の加速化」が必要

孤立(無縁)・排除の課題 (Universal支援の1つ)

無縁・孤立を防止するために「地域の再生」が謳われている
「地域性」が子ども家庭福祉や家庭教育の取組に導入されている
例えば、「地域子育て支援拠点事業」



不景気(公助<共助・自助)が
「プライバシー重視・公的サービス依存の(都市)生活」への懷疑

Universal支援とTarget支援が連続する仕組

家庭訪問を含めて支援には「すべての人が受けるもの(Universal)」と「課題を抱える人が受けるもの(Target)」がある:本研究協議 のテーマ「家庭訪問」で考えると、乳児家庭全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)はUniversal支援、養育支援訪問事業はTarget支援

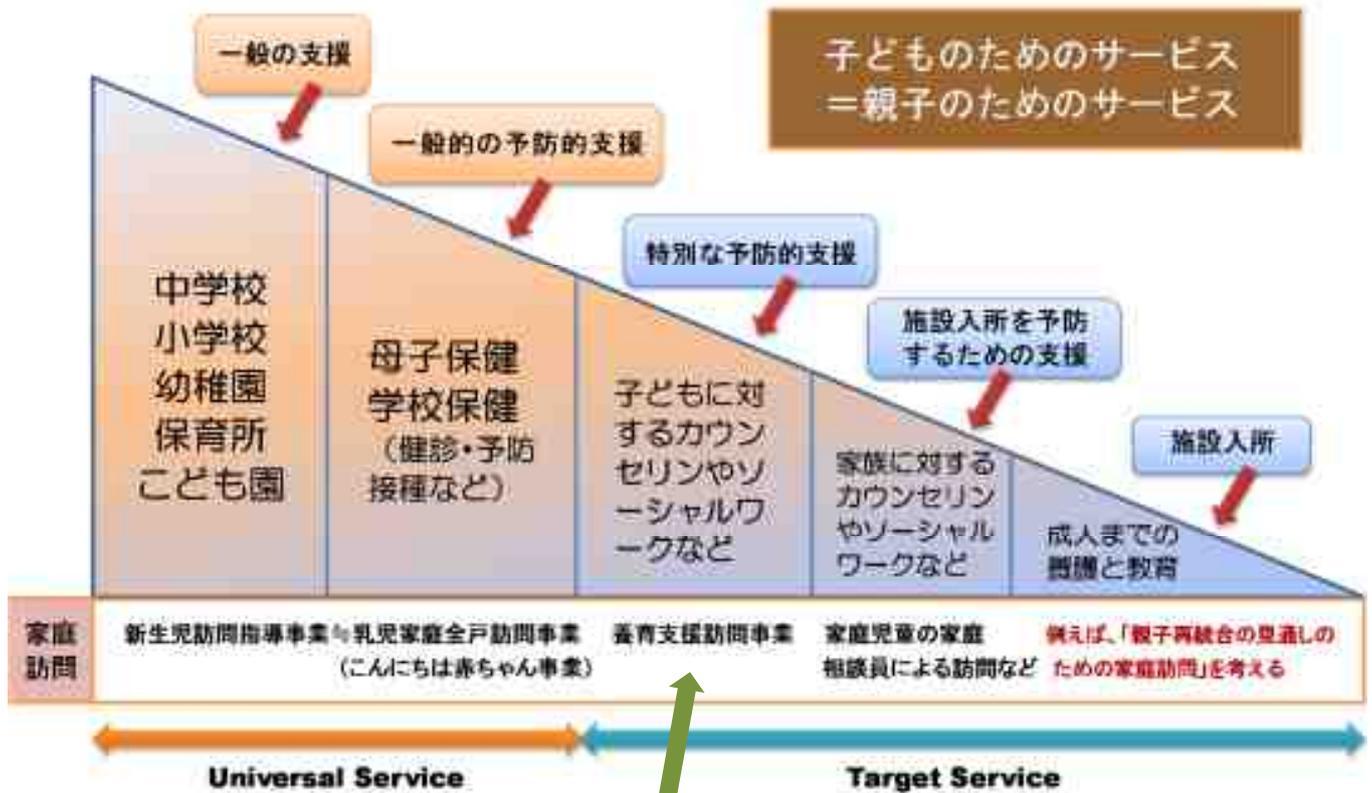
訪問支援を受ける家庭の立場からすると、「強制的に監視される」「訪問される」ことへの抵抗感がある(中村・石井 2011)

希望する産後家庭訪問者(職種)に関する調査(寺村 2012)によると、訪問希望女性の98%近くが「自分が出産した産科施設の助産師」顔なじみの(信頼できる)支援者なら抵抗はない 「ココから」家庭訪問サービスは出発し、各家庭の状況から生じるニーズに対応する訪問支援および子どもの年齢から生じるニーズに対応する支援とそれを担当できる支援者や支援の場・支援の仕組などを順次紹介していく 切れ目のない支援

上記の支援者は、「地域支援チーム(家庭訪問に特化する必要はない)」に所属しており、必要に応じて各家庭にアウトリーチする(後で詳述)

6ページのスライドで述べる「Universal支援の中にTarget支援を組み入れる」という仕組(伊藤試案)は、ロンドン大学J.Boddyら(2009)の報告書に掲載されていたDenmarkの仕組(制度)を参照している

注:J.Boddyら(2009)の図を伊藤篤が日本の実情に合わせて修正(2013年9月)



家庭訪問もこの連続線上でその内容・訪問者等を考えたらよい

Universal 支援の中に Target 支援を組み入れたモデル (家庭訪問も含む)

注:J.Boddyら(2009)を参考に伊藤篤が作図(2013年9月)



- ◇SW は、決められた地域 (自治会単位、小学校学区など、市町村の状況に応じて決める) の子どもの生まれた家庭の担当となり (子どもが **18** 歳まで)、最終責任を持つ。
- ◇専門職 **TEAM** は、基本的に **Professional Mix** であり、**School** および **Out of School** に必要に応じてアウトリーチするし、**School** および **Out of School** のスタッフからの情報提供に応じ、家庭の抱える問題を考慮して、家庭訪問チームを構成してする。基本的には、助産師、保健師、保育士、医師、心理士、弁護士、警察官などがこのメンバーとなる。
- ◇**School Setting** に配置される「□」は、スクール・カウンセラーまたはスクール・ソーシャル・ワーカーとなる。